

箴言24-27章「時にかなった知恵」

1A 倒れる者と立つ者 24

1B 知恵者の力 1-22

2B 公正と勤勉 23-34

2A 王から来る知恵 25

1B 王による正義 1-10

2B 時宜にかなった行ない 11-28

3A 役に立たない者 26

1B 愚か者と怠け者 1-16

2B 争う者 17-28

4A 友人への愛 27

1B 誇りの問題 1-10

2B 父からの言葉 11-27

本文

箴言 24 章を開いてください。私たちは前回、22 章 17 節から「知恵ある者のことば」を読んでいきます。三十句ある格言を読み進めていますが、その途中から入ります。箴言において取り扱っている問題はいくつかに分かれますが、前回はお酒の問題がその一つでした。23 章の終わりには、強い酒にふける者があらゆる愚かなことをするという戒めで終わっていました。そして 24 章に入ります。

1A 倒れる者と立つ者 24

1B 知恵者の力 1-22

24:1 悪い者たちをねたんではならない。彼らとともにいることを望んではならない。24:2 彼らの心は暴虐を図り、彼らのくちびるは害毒を語るからだ。

酒を飲んだり、肉を貪り食う、そのような者たちと交わるなど 23 章 20 節にありました。妬んでもいけないし、また共にいることも望んでいけません。羨望という言葉がありますが、激しく反応して嫌がることと、その仲間になりたいことは正反対のようで、根っこは同じです。反発はその交わりに魅かれていることの裏返しだからです。悪から離れます、それは心の中にある相手を傷つけたいという思い、口や行ないによって相手を引き落としたい、そのような暴虐や害毒が悪です。

24:3 家は知恵によって建てられ、英知によって堅くされる。24:4 部屋は知識によってすべて尊い、好ましい宝物で満たされる。

家の中に知恵と知識があることを尊んでいます。知恵と知識が家の中から始まります。それによって初めて、神の家に知恵と知識が満ちます。ゆえに、子を育てる母の働きは尊いですね。

24:5 知恵のある人は力強い。知識のある人は力を増す。24:6 あなたはすぐれた指揮のもとに戦いを交え、多くの助言者によって勝利を得る。

知恵と知識は力を与えます。そして戦いに勝利を与えます。戦いにおいては、多くの助言者が必要です。密議が必要です。その上で戦いに出ます。

24:7 愚か者には知恵はさんごのようだ。彼は門のところで、口を開くことができない。24:8 悪事を働こうとたくらむ者は、陰謀家と言われている。24:9 愚かなはかりごとは罪だ。あざける者は人に忌みきらわれる。

知恵の前に愚か者は口を閉ざします。「門」というのは、当時の町は城壁に取り囲まれており、門で裁きを行なっていましたが、そこに知恵が表れていました。しかし愚か者は黙ってしまいます。その代わり彼は、隠れて何かを行おうとします。主の前に出れば自分が裸にならなければいけない、その恥を負わなければいけません。ですから、他の人には話さないでこそそと計画を立てるのです。けれども、そうした隠れて行なっているということ自体が、人々に嫌悪感を抱かせます。

24:10 もしあなたが苦難の日に気落ちしたら、あなたの力は弱い。

箴言は、心の健康について多くを語っています。18章14節にも同じことが書いてあって、「人の心は病苦をも忍ぶ。しかし、ひしがれた心にだれが耐えるだろうか。」とありました。苦しみに会う時に私たちは主にある励ましと慰めを受ける、その務めがあります。それは選択ではなく、義務です。心を主の恵みによって強くしていただくのです。「ヘブル 13:9 さまざまの異なった教えによって迷わされてはなりません。食物によってではなく、恵みによって心を強めるのは良いことです。」

24:11 捕えられて殺されようとする者を救い出し、虐殺されようとする貧困者を助け出せ。24:12 もしあなたが、「私たちはそのことを知らなかった。」と言っても、人の心を評価する方は、それを見抜いておられないだろうか。あなたのたましいを見守る方は、それを知らないだろうか。この方はおのおの、人の行ないにに応じて報いないだろうか。

困っている人に、単なる同情する言葉ではなく、具体的な助けの手を伸ばすことは、新約聖書にも命じられていることです(1ヨハネ 3:17)。そして私たちの弁解は、「知らなかった」というものです。けれどもその時に私たちは心を探らないといけません。実は知っているのです、けれども助けの手を伸ばしたくないので、自分の心に欺いて、知らないことにしてしまいます。ヤコブはこのことについて、「なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。(4:17)」

と言いました。

24:13 わが子よ。蜜を食べよ。それはおいしい。蜂の巣の蜜はあなたの口に甘い。24:14 知恵もあなたのたましいにとっては、そうだと知れ。それを見つけると、良い終わりがあり、あなたの望みは断たれることがない。

知恵を得ることがどんなに良いことなのか、蜜を食べることに例えています。知恵の特徴は「良い終わり」です。その過程では、自分で悟ることのできないことが起こっても、良い終わりを保証します。そして望みが絶たれることはありません。使徒パウロも、患難によって生み出された「この希望は、失望に終わることはありません。(ローマ 5:5)」と言いました。

24:15 悪者よ。正しい人の住まいをねらうな。彼のいこいの場所を荒らすな。24:16 正しい者は七たび倒れても、また起き上がるからだ。悪者はつまずいて滅びる。

正しい者が立ち上がりますが、悪者は廃れます。正しい者というのは、神を信じる正しさです。義人は信仰によって生きるとハバククに神が語られた、信仰による正しさです。その人は、倒れたように見えても、それが七度起こっても、それでも起き上がることができます。パウロがこう言いました。「私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。(1コリント 4:8-10)」

24:17 あなたの敵が倒れるとき、喜んではならない。彼がつまずくとき、あなたは心から楽しんではいけません。24:18 主がそれを見て、御心を痛め、彼への怒りをやめられるといけなから。

これは神のユーモアとも言える強い戒めです。神は、決して人が倒れることを喜ばれません。それを喜ぶ者に対して、エゼキエル書やオバデヤ書では、イスラエルの敵に対して裁きを行なわれる箇所があります。ヨナ書において、神の憐れみが明らかに現われました。四十日で滅びるとヨナは説教したのに、彼らは悔い改めて祈ったので、神は憐れんでその裁きを控えられたのです。

24:19 悪を行なう者に対して腹を立てるな。悪者に対してねたみを起こすな。24:20 悪い者には良い終わりがなく、悪者のともしびは消えるから。

悪者が滅びることを願わず悲しみ、祈るのですが、悪者が悔い改めないならそのまま滅んでしまいます。いずれにしても、妬むということはその悪に既に関わってしまったことです。悪は主の御手の中にあるので、主にお任せする必要があります。

24:21 わが子よ。主と王とを恐れよ。そむく者たちと交わってはならない。24:22 たちまち彼らに災難が起こるからだ。このふたりから来る滅びをだれが知りえようか。

王に与えられた権威は、神からのものであり、神によって立てられています(ローマ 13:1)。したがって、王に背く、今でならば法律に背くことをすれば、その違反に対する罰は免れることはできません。

2B 公正と勤勉 23-34

さてここまでが、知恵ある者による三十句の格言でした。確かに数えると三十あります。そして残りも、また知恵ある者による格言です。

24:23 これらもまた、知恵ある者による。さばくときに、人をかたより見るのはよくない。24:24 悪者に向かって、「あなたは正しい。」と言う者を、人々はこのしり、民はのろう。24:25 しかし、悪者を責める者は喜ばれ、彼らにはしあわせな祝福が与えられる。24:26 正しい答えをする者は、そのくちびるに口づけされる。

裁判における公正さを教えています。人には、神から与えられた良心があり、必ず悪に対して悪の報い、善に対しては善の報いがあることを願っています。その公正をしっかりと実践する時に、人々は満足します。

24:27 外であなたの仕事を確かなものとし、あなたの畑を整え、そのあとで、あなたは家を建てよ。

勤勉さについての戒めです。30 節から怠け者についての格言がありますが、その対比です。家を建てるのですから、それだけの金銭的備えがなければいけません。そこで仕事を確かなものとする、そして畑を整える。経済的に安定が与えられて初めて、家の建築を考えることができます。

24:28 あなたは、理由もないのに、あなたの隣人をそこなう証言をしてはならない。あなたのくちびるで惑わしてはならない。24:29 「彼が私にしたように、私も彼にしよう。私は彼の行ないに応じて、仕返しをしよう。」と言ってはならない。

再び裁判における戒めです。証言において、真実であれば隣人に不利な証言をしても仕方がありません。正しく答えることが最優先にすべきです。けれども、根拠もないのに不利になるような証言をするということは、その人に対する敵意があるからに他なりません。証言が、相手への恨みによって曲げられているということです。悪に対して悪で報いたら、自分自身が悪に染まることになります。だから、仕返しはそれ自体が自己矛盾しています。悪に打ち勝つのは善でしかありません。

24:30 私は、なまけ者の畑と、思慮に欠けている者のぶどう畑のそばを、通った。24:31 すると、

いばらが一面に生え、いらくさが地面をおおい、その石垣はこわれていた。24:32 私はこれを見て、心に留め、これを見て、戒めを受けた。24:33 しばらく眠り、しばらくまどろみ、しばらく手をこまねいて、また休む。24:34 だから、あなたの貧しさは浮浪者のように、あなたの乏しさは横着者のようにやって来る。

前回、怠惰の問題を取り扱いました。その結末がこの有様です。霊的にこれを当てはめると、どうなるでしょうか？怠けるということは、33 節にあるように、主の命令に対して決して「やりません」と答えません。けれども、「はい、分かりました。」という応答、従順になることも表明しません。このような応答なしの信仰生活、はいでもなければ、いいでもない生活は、やがて自分の心にある防備が壊されて、そしていばらやいらくさ、すなわち世の思い煩いが多くなり実を結ばせることはありません。

2A 王から来る知恵 25

1B 王による正義 1-10

25:1 次もまたソロモンの箴言であり、ユダの王ヒゼキヤの人々が書き写したものである。

25 章から 29 章までの部分は、ここに書かれているとおり後世のヒゼキヤの時代の人たちが、ソロモンの箴言を編集したものです。ソロモンがこれらの箴言を書いた約 250 年後のことです。ヒゼキヤは、主の前に正しい人でした。主を求めて国の改革を断行した人でした。アッシリヤの大軍がエルサレムを包囲しても、主の宮の前で衣を裂き、主に救いを願い求めた人でした。そのヒゼキヤが知恵を得るためにソロモンの箴言をまとめさせました。王の職務について、また王として知っておかなければいけないことなどが中心に描かれています。

25:2 事を隠すのは神の誉れ。事を探るのは王の誉れ。25:3 天が高く、地が深いように、王の心は測り知れない。25:4 銀から、かなかすを除け。そうすれば、練られて良い器ができる。25:5 王の前から悪者を除け。そうすれば、その王座は義によって堅く据えられる。25:6 王の前で横柄ぶってはならない。偉い人のいる所に立ってはいけない。25:7a 高貴な人の前で下に下げられるよりは、「ここに上って来なさい。」と言われるほうがよいからだ。

王は神によって立てられ、そして裁きの座に着いているので、神からの知恵がふんだんに与えられ、御霊によって一つ一つの事例に判断を下さないといけませんが、その知恵と知識の賜物を神は王に下さいます。ゆえに、王の心に神のお心のような深さと高さが与えられます。そこで大事なのは、悪者を取り除かれることです。ダビデが王の時、またソロモンもそうでしたが、暴虐な者、背く者を取り除いたことによって、平和と正義が国に確立しました。

そして興味深いのは、王の前では末席に着きなさいという勧めです。王がもしかしたら、上席に移動させるかもしれません。同じことをイエス様が語られましたね。パリサイ人たちが上席を選ぼう

としている所で、末席に座らないと恥ずかしい思いをする。けれども末席であれば、引き上げられるだけだ。だから自分を高くする者は低くされて、低める者は高くされる、ということです。

25:7b あなたがその目を見たことを、25:8 軽々しく訴えて出るな。そうでないと、あとになって、あなたの隣人があなたに恥ずかしい思いをさせたとき、あなたはどのようにするのか。25:9 あなたは隣人と争っても、他人の秘密を漏らしてはならない。25:10 そうでないと、聞く者があなたを侮辱し、あなたの評判は取り返しのつかないほど悪くなる。

再び王の前で、裁判で、証言台に立つときの戒めです。二つあり、一つは「軽々しく訴え出る」ことです。私たちは自分の目を見たことを、果たしてその通りなのかどうか立ち止まって確かめることなく、訴えてしまいます。そして、もう一つの問題は「他人の秘密を漏らす」ということです。誰かを訴える時に、その信憑性を強めるため、自分の立場を守るために他者を利用しようとします。どちらも信頼を損ねる行為です。

2B 時宜にかなった行ない 11-28

11 節からは、「時宜にかなった行ないや言葉」が取り上げられています。タイミング、時が大事ということです。

25:11 時宜にかなって語られることばは、銀の彫り物にはめられた金のりんごのようだ。25:12 知恵のある叱責は、それを聞く者の耳にとって、金の耳輪、黄金の飾りのようだ。

これができるのは、御霊の賜物によってです。主が必要な時に、その瞬間に知恵の言葉、知識の言葉を与えてくださいます。この時にこそ必要な言葉だというものを語るのは、預言であり、それを賜物として神は与えてくださいます。

25:13 忠実な使者はこれを遣わす者にとって、夏の暑い日の冷たい雪のようだ。彼は主人の心を生き返らせる。25:14 贈りもしない贈り物を自慢する者は、雨を降らせない雲や風のようだ。

13 節と 14 節は、前者が時宜にかなったもので、後者が時を外しているということで対照的です。なぜ遣わすのかと言えば、自分で行けないからです。それを夏の暑い日に例えています。その時に自分ではできないことをしてもらえるのですから、冷たい雪のようにありがたいと思います。私たちが忠実に、主に命じられていることを行なっているでしょうか？その人は神にとって、暑い日の冷たい雪になってくれています。

その反面、贈り物をすると行ってしまえば、聞いている人は期待します。それを雲や風に例えています。けれども、それを実行しないと期待を膨らませておきながら失望させてしまいます。

25:15 忍耐強く説けば、首領も納得する。柔らかな舌は骨を砕く。

忍耐さと柔和さ、これは人の心を変えるのに用いられる、神から与えられる品性です。パウロがテモテに教えました。「反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさい。もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせてくださるでしょう。(2テモテ 2:25)」

25:16 蜜を見つけたら、十分、食べよ。しかし、食べすぎて吐き出すことがないように。25:17 隣人の家に、足しげく通うな。彼があなたに飽きて、あなたを憎むことがないようにせよ。

これは興味深い二つの格言です。「良いものであっても、多すぎると消化不良を起こす」ということです。蜜を食べると良いのですが、食べ過ぎるのはだめです。同じように隣人の家に行くのは、その友人が初めは喜びますが、彼にもいつもの生活があり、ずっともてなすことはできません。ですから、良いものであってもやりすぎると嫌悪感があります。

25:18 隣人に対し、偽りの証言をする人は、こん棒、剣、また鋭い矢のようだ。25:19 苦難の日に、裏切り者に抛り頼むことは、悪い歯や、なえた足を頼みとするようなものだ。25:20 心配している人の前で歌を歌うのは、寒い日に着物を脱ぐようであり、ソーダの上に酢を注ぐようなものだ。

18 節と 19 節は、「本当に頼らなければいけない時に裏切られて、傷を受ける。」ということです。証言こそ、訴えている人には唯一の頼りなのに、そこで偽りを言われてしまう。そして苦しみの時に裏切られると、それも弱い状態にさらに重荷が負わされることになります。そして 20 節ですが、歌うのは良いことですが、相手の心の状態によれば、さらに悪化させることになります。

25:21 もしあなたを憎む者が飢えているなら、パンを食べさせ、渴いているなら、水を飲ませよ。25:22 あなたはこうして彼の頭に燃える炭火を積むことになり、主があなたに報いてくださる。

先ほどの、自分を憎む者が倒れた時に、喜んでほならないという戒めにつながる部分です。憎む者たちに良くしてあげることが必要です。そして、そのことによって相手が神に対して申し開きしなければならなくなります。ここをパウロがローマ人への手紙で引用しました。「もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。(ローマ 12:20-21)」

25:23 北風は大雨を起こし、陰口をきく舌は人を怒らす。25:24 争い好きな女と社交場にいるよりは、屋根の片隅に住むほうがよい。

争いの言葉です。陰口は、大声で争うのと同じような害をもたらします。陰口を北風に、人の怒り

が大雨に例えています。そして争い好きな女です。他者を妬んだり、陰口を言ったり、そういうことをするので、その社交場が害毒をまき散らす場となってしまいます。屋根の片隅にいたい気分になるということです。

25:25 遠い国からの良い消息は、疲れた人への冷たい水のような。25:26 正しい人が悪者の前に屈服するのは、きたなくされた泉、荒らされた井戸のような。

25 節は、まさに時宜にかなったことですね。遠い国からの消息は、私たちの魂を癒してくれます。そして 26 節は、妥協することのもたらす害です。神の義に生きるからこそ、そこが泉となり井戸となっているのに、屈服したらそれを汚してしまいます。

25:27 あまり多くの蜜を食べるのはよくない。しかし、りっぱなことばは尊重しなければならない。
25:28 自分の心を制することができない人は、城壁のない、打ちこわされた町のようだ。

27 節の訳は七十人訳によるもので、ヘブル語の訳は、「自分の栄光を探り出すのは栄光」となります。つまり、自分の栄光を求めているのは、あまりにも多くの蜜を食べているのと同じだということです。後で出てきますが、誇るのは主にあって誇り、自分に留めているべきなのです。主によって与えられた栄光はそれ自体は良いのですが、それを自分が求めてしまうと台無しになります。

そしてこれは、心を制する問題です。それができれば、城壁を築き、敵に対峙できるのですが、同じように心を制することによって、その人は霊の戦いでも強くなることになります。

3A 役に立たない者 26

そして 26 章は、愚か者と怠け者、また争う者がどのような存在かをいろいろな例えで言い表している内容です。

1B 愚か者と怠け者 1-16

26:1 誉れが愚かな者にふさわしくないのは、夏の雪、刈り入れ時の雨のようだ。26:2 逃げる雀のように、飛び去るつばめのように、いわれの無いのろいはやって来ない。26:3 馬には、むち。ろばには、くつわ。愚かな者の背には、むち。

愚かな者に誉れを与えることのミスマッチ。それから、呪いについてですが、たとえ誰かを呪っても、それは実質が伴っていないので、雀やツバメのように飛び去ります。そして、愚か者に相応しいのは、誉れではなく鞭です。

26:4 愚かな者には、その愚かさにしたがって答えな。あなたも彼と同じようにならないためだ。
26:5 愚かな者には、その愚かさにしたがって答えよ。そうすれば彼は、自分を知恵のある者と思

わないだろう。

これは興味深い格言です。全く正反対のことを並列しています。けれども、これはその状況でどちらかに従うのです。愚かさについて、それに触れてはいけません。下品な言葉を例えば言うとするでしょう、同じように話していたら自分を汚すことになります。けれども、相手に知恵ある言葉だと分かるように話してしまえば、彼は身構えてしまいます。イエス様が、このことを数多くパリサイ人などに行われたのではないのでしょうか？ 分かり易い譬えで語られ、それが知恵ある言葉であるかどうかは一見分かりません。

26:6 愚かな者にことづけする者は、自分の両足を切り、身に害を受ける。26:7 愚かな者が口にする箴言は、足なえの垂れ下がった足のようだ。26:8 愚かな者に誉れを与えるのは、石投げ器に石をゆわえるようだ。26:9 愚かな者が口にする箴言は、酔った人が手にして振り上げるいばらのようだ。26:10 愚かな者や通りすがりの者を雇う者は、すべての人を傷つける投げ槍のようだ。

愚か者には相応しくないものが与えられたらどうなるのかを示しています。先ほどは忠実な使者がいましたが、ここは愚か者がことづけをする時のことです。自分の足が切られるような、つまり自分で行ったほうがよかった、いやもう取り返しがつかない状態にさせます。それから、同じ箴言であっても、主の命令に聞き従わない鈍い心の者が語ったら、あつて無能な言葉となります。そして、愚か者に誉れというのは、例えば大切な任務を与えたら、石投げ器に石をゆわえる、つまりいつ外れて、どこに飛んでいくか分からない危険なものになる、ということです。酔った人がいばらを振るのも同じ意味です。そして、雇うことも同じで、助かるどころか傷を負わせていくことになります。

26:11 犬が自分の吐いた物に帰って来るように、愚かな者は自分の愚かさをくり返す。26:12 自分を知恵のある者と思っている人を見ただろう。彼よりも、愚かな者のほうが、まだ望みがある。

愚かな者の特徴は、「繰り返す」ことです。「はい、これからやり直します。」と口では言います。けれども、結局、どこにいても同じことをしているのです。ペテロがこれを手紙の中で引用しています。「義の道を知っていながら、自分に伝えられたその聖なる命令にそむくよりは、それを知らなかったほうが、彼らにとってよかったのです。彼らに起こったことは、『犬は自分の吐いた物に戻る。』とか、『豚は身を洗って、またどろの中に入ることになる。』とかいう、ことわざどおりです。(2ペテロ 2:21-22)」

そして愚か者についての最後の格言は、「自分が知恵ある者だと思っている。」ということです。「自分は愚かではない、それなりの知識と知恵がある。」こういった態度がつまりは、主を恐れるのではなく自分の悟りに頼っている、あるいは父が子に対する叱責のように、教えられる心がないので、知恵から遠く離れることになります。

26:13 なまけ者は「道に獅子がいる。ちまたに雄獅子がいる。」と言う。26:14 戸がちょうつがい
回転するように、なまけ者は寝台の上でころがる。26:15 なまけ者は手を皿に差し入れても、それ
を口に持っていくことをいとう。26:16 なまけ者は、分別のある答えをする七人の者よりも、自分を
知恵のある者と思う。

怠け者についての格言です。彼も同じですね、分別のある七人よりも自分を知恵のある者と思っ
ています。自分は体を動かしていないので、つまり主の命令に聞き従わず、ただ思っているだけ、
話しているだけなので、その考えていることで自分は知恵があると思込んでいます。知恵のある
人、悟りのある人は、話す前に、実行しています。それで話していることに実質が伴っていることが
明らかにされます。

2B 争う者 17-28

次は争う者についての格言です。

26:17 自分に関係のない争いに干渉する者は、通りすがりの犬の耳をつかむ者のようだ。

争いは当事者で解決すべきものです。それを、第三者が入ってくることによって、周囲の人々は
引っ掻き回されます。

26:18 気遣いは、燃え木を死の矢として投げるが、26:19 隣人を欺きながら、「ただ、戯れただけ
ではないか。」と言う者も、それと同じだ。

争いをかきたてているのに、「ちょっと遊んでみただけだよ。」とうそぶくこともします。

26:20 たきぎがなければ火が消えるように、陰口をたたく者がなければ争いはやむ。26:21 おき
火に炭を、火にたきぎをくべるように、争い好きな人は争いをかき立てる。26:22 陰口をたたく者
のことは、おいしい食べ物のように。腹の奥に下っていく。

陰口の害です。それを聞いている時、おいしい食べ物のように入っていきます。けれども、それ
は火にたきぎをくべるようなもので、争いを引き起こします。

26:23 燃えるくちびるも、心が悪いと、銀の上薬を塗った土の器のようだ。26:24 憎む者は、くち
びるで身を装い、心のうちでは欺きを図っている。26:25 声を和らげて語りかけても、それを信じ
るな。その心には七つの忌みきられるものがあるから。26:26 憎しみは、うまくごまかし隠せて
も、その悪は集会の中に現われる。

語っている言葉そのものは、柔らかいものかもしれません。言葉そのものは、クリスチャンとして

相応しいものかもしれません。けれども、心が悪い時、そのメッキは必ずはがれます。憎む者はその心を隠し、欺きます。けれども 26 節にあるように、集会にその悪が表れてきます。心の憎しみや苦み、敵対心は独りだけの問題ではなく、全体を汚すのです。取り除かないといけない肉の行いとして、「そしり」があります(1コリント 5:11)。

26:27 穴を掘る者は、自分がその穴に陥り、石をころがす者は、自分の上にそれをころがす。

26:28 偽りの舌は、真理を憎み、へつらう口は滅びを招く。

結局、陰口を言う者は、自分の言ったことによって穴に陥っていきます。恐いですね、自分自身が主から離れていくようにさせていくのです。

4A 友人への愛 27

そして 27 章です。26 章は愚か者、友人を引き離す陰口について書きましたが、27 章は友人との結びつき、人との関係についての格言が多くあります。

1B 誇りの問題 1-10

27:1 あすのことを誇るな。一日のうちに何が起こるか、あなたは知らないからだ。27:2 自分の口ではなく、ほかの者にあなたをほめさせよ。自分のくちびるではなく、よその人によって。

私たちがどのようにして明日を誇るのでしょうか？一つは、怠慢です。「明日やるから」と言って、やるかどうか分からないことを公言します。もう一つは、「向上心」です。「私は、これこれのことをやります。」と言っているのは、「そのようになりたい、やりたい」という希望を言い表しているだけで、実際にするものではありません。人には、理想の、こうあるべきだという自分がいて、そうではない今の現状の自分がいますからそのギャップを埋めるために、これからの自分は違う、このようにするのだと言ってみるのです。

けれども、人は墮落しています。そのようにならずに、相変わらずの自分が次の日もいるだけです。そうではなく、主の憐れみによってのみ事が進みます。ですから、ヤコブはこの箇所を引用しながら、こう言いました。「4:14-15 あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」主の御心なら、そのようにするのです。

そして、自分の誇りについては主がしてくださったものですから、自分自身の内に留めておきます。「おのおの自分の行ないをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。(ガラテヤ 6:4)」

27:3 石は重く、砂も重い。しかし愚か者の怒りはそのどちらよりも重い。27:4 憤りは残忍で、怒りはあふれ出る。しかし、ねたみの前にはだれが立ちはだかることができよう。27:5 あからさまに責めるのは、ひそかに愛するのにまさる。27:6 憎む者がくちづけしてもてなすよりは、愛する者が傷つけるほうが真実である。

ここでの戒めは、妬みです。これまで怒りの問題はとりあげましたが、怒り以上に妬みは制御の利かないものとしてソロモンは語っています。怒りについてはその人本人のプライドが原因ですが、妬みは他者が絡んでいます。そして、相手を何とかして引き落としたいという結びつき、執着心、そして憎しみであります。実に、イエスを十字架につけたのはユダヤ人指導者たちの妬みでありました。

そしてそうした悪意と対比して、真実な叱責があることを教えてくれています。愛するということは、時に相手を傷つけることがあります。優しく語るということは、実は相手が悪いところに進んでいるのを見放すという憎しみでもあるのです。憎しみの先、その究極の形は無関心であるとある人は言いました。けれども、愛のある人は時にははっきりと言います。それは外科手術のように傷が付きまます。けれども、それを受けた人は次に治癒が待っています。同じように愛によって傷を受けたのであれば、その傷は癒しのためであるのです。

27:7 飽き足りている者は蜂の巣の蜜も踏みつける。しかし飢えている者には苦い物もみな甘い。
27:8 自分の家を離れてさまよう人は、自分の巣を離れてさまよう鳥のようだ。

飽き足りている時には、なぜか満足できません。不満が出てきます。けれども、飢えている時は何でも感謝できます。私たちが、主にあって充足するのではなく、その他の物に満ちている時に、その大切なものをも踏みつけることはないでしょうか？霊的にも、兄弟姉妹が祈ってくれたこと、時間を取ってくれたこと、骨折って世話してくれたこと、それを踏みにじることがないでしょうか？

そして飽き足りると家出します。放蕩息子のように出ていきます。キリストにあって満ちている、そしてキリストの満ちる教会で満足する、けれども豊かにされればされるほど、自分は反発し、そこから離れるということもあるのです。不足しているから離れるのではなく、満たされているから離れます。

27:9 香油と香料は心を喜ばせ、友の慰めはたましいを力づける。27:10 あなたの友、あなたの父の友を捨てな。あなたが災難に会うとき、兄弟の家に行くな。近くにいる隣人は、遠くにいる兄弟にまさる。

友人の大切さです。友の慰めは魂を力づけます。そして、その友のほうが遠くにいる家族や親戚よりも助けてくれるのです。ですから、友を捨ててはいけません。友は、苦しみの時に生まれるも

のであるという箴言もありました。

2B 父からの言葉 11-27

27:11 わが子よ。知恵を得よ。私の心を喜ばせよ。そうすれば、私をそしる者に、私は言い返すことができよう。

改めて「わが子よ」と呼びかけています。父から愛する子に対する教え、訓練になります。そして知恵を得ている息子であれば、他の人たちが彼を中傷しようとも、十分に反論できるとのことです。

27:12 利口な者はわざわいを見て、これを避け、わきまのない者は進んで行って、罰を受ける。

27:13 他国人の保証人となるときは、その者の着物を取れ。見知らぬ女のためにも、着物を抵当に取れ。

災いの中に入らないで自ら避けるというのが知恵です。そして、その一つに保証人になることです。特に女には弱いですから、決して抵当無しの保証になってはいけないと戒めています。

27:14 朝早くから、大声で友人を祝福すると、かえってのろいとみなされる。

先の「時宜にかなった言葉」に通じる戒めです。タイミングをずらすと、祝福が呪いとなります。人々の気持ちや心の状態に敏感になって、すべきことをしていくべきです。

27:15 長雨の日にしたたり続ける雨漏りは、争い好きな女に似ている。27:16 その女を制する者は、風を制し、右手に油をつかむことができる。

油をつかむ、つまり制することができないということです。

27:17 鉄は鉄によってとがれ、人はその友によってとがれる。27:18 いちじくの木の子は実を食う。主人の身を守る者は誉れを得る。

横の関係と縦の関係です。友と友の関係においては、それは鉄が鉄を研ぐ関係です。いかがでしょうか、自分のわがままを聞いてくれる人は友ではありません。むしろ、互いにキリストにあってはっきり話します。拒否されるという恐れがないので、互いに話せるのです。これを英語ではアカウンタビリティーのある関係と言います。時に厳しいことを言う、けれども仲間だからこそ言えるのです。そして縦の関係というのは、主人と僕の関係です。主人のところにもいつもいる僕は、誉れという実を結ばせることができます。

27:19 顔が、水に映る顔と同じように、人の心は、その人に映る。27:20 よみと滅びの淵は飽くこ

とがなく、人の目も飽くことがない。27:21 るつぼは銀のため、炉は金のためにあるように、他人の称賛によって人はためられる。27:22 愚か者を臼に入れ、きねでこれを麦といっしょについても、その愚かさは彼から離れない。

人の心は現れてくるものです。その人の顔や雰囲気、その心が映し出されています。そして、人の目ですが、ちょうど人の死というのはブラック・ホールのようにどんどん訪れて、陰府はいっぱいにならないのか？と心配しても、飽くことはありません。けれども、人の目も貪って飽くことはありません。

それから、心は他人の称賛によって試されます。心が高ぶることも、他人の称賛によって起こります。けれども称賛が悪いのではなく、元々、自分が持っているものは何もなく、主が与えてくださったものであることをしっかりと心に留めているのであれば、ほめる言葉は神からのものであるとして、神に栄光を帰すことができます。ですから心のあり方が試されるのです。そして、愚かさについては、神が懲らしめない限り、直りようがありません。ですから、祈るのです。人は人を変えることはできません。神が変えてくださるよう祈ります。

27:23 あなたの羊の様子をよく知り、群れに心を留めておけ。27:24 富はいつまでも続くものではなく、王冠も代々に続かないからだ。27:25 草が刈り取られ、若草が現われ、山々の青草も集められると、27:26 小羊はあなたに着物を着させ、やぎは畑の代価となる。27:27 やぎの乳は十分あって、あなたの食物、あなたの家族の食物となり、あなたの召使いの女たちを養う。

最後は勤勉さについての格言ですが、とても大切なことです。富や地位はいつか去っていくものです。見ていかなければいけないのは、羊の様子です。その羊こそが、食物になり、召使いにも食べさせることのできる食物になります。季節は変わります。草、若草、青草と変わっていきます。しかし、羊を養うことは確実に自分たちの支えとなるのです。皆さんにとっての羊の群れは何でしょうか？自分が任されているものは何ですか？それに忠実に仕えていますか？しっかりと手を動かしていますか？足を動かしていますか？それとも、目の前にあることに追われて、霊を養うことを怠っていませんか？目の前にあること、追っているものはもしかしたら過ぎ去るかもしれません。本当に大切なもの、自分が仕えてもたらされる実、それに目を留めてください。